

これたかしんのう くもがはたいんせいのみず  
「惟喬親王鴨川源流雲ヶ畑隱棲之図」解説文

日本画光玄会 水谷進一

惟喬親王は平安初期第55代文<sup>もん</sup>徳<sup>とく</sup>天皇の第一皇子として生まれた。承和11年(西暦844年)。

栄華の最中にある藤原家、良<sup>よし</sup>房<sup>ふさ</sup>の攝<sup>せつ</sup>政<sup>しょう</sup>により、天皇になるべき惟喬親王は蟄<sup>ちつきよ</sup>居<sup>よ</sup>された。

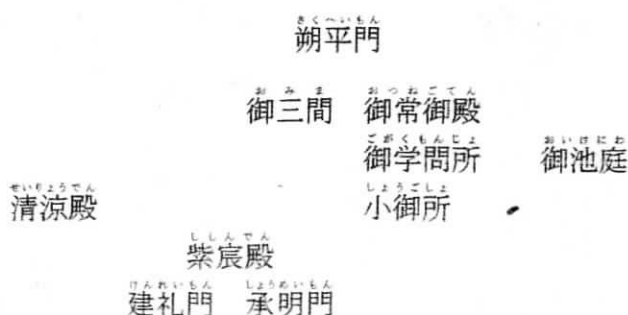
鴨川源流の雲ヶ畑から大量の木材が運ばれたであろう。都では、平安京造営が続いており、多くの木材が必要である。想像に難くはない。都の造営には幾百の技師、幾千の土木、木工の工人、彼らの宿舎、住まいから作らねばならない。

親王は蟄居されながらも、和歌に親しみ、木工技術などを身に付けた。親王は横<sup>かいてんろくろ</sup>回<sup>ろくろ</sup>転<sup>ろくろ</sup>轆<sup>ろくろ</sup>を考え、丸加工技術を彼らに教えた。身分の低い彼らは、木工技術だけでなく、木<sup>き</sup>地<sup>じ</sup>師<sup>し</sup>としての惟喬親王を奉<sup>たてまつり</sup>り木工たちは自分達の地位を向上させた。

惟喬親王の愛鳥、鷹<sup>たか</sup>を祀<sup>まつ</sup>った祠<sup>ほくら</sup>が雲ヶ畑にある。『伊勢物語』の主人公、在<sup>あり</sup>原<sup>わらの</sup>業<sup>なり</sup>平<sup>ひら</sup>もまた悲運の皇子であり、惟喬親王とは親友のなかである。ともに和歌を詠み、鷹狩を楽しんだ。雲ヶ畑の奥「<sup>さじき</sup>敷<sup>が</sup>ヶ<sup>だけ</sup>岳<sup>だけ</sup>」で鷹狩をやり、和歌を詠み、都を偲んだことであろう。

親王はこの白<sup>せい</sup>い清<sup>せい</sup>楚<sup>そ</sup>な山<sup>やま</sup>芍<sup>しやく</sup>薬<sup>やく</sup>の華<sup>はな</sup>も見たに違いない・・・!?・・・と私見を含めて、惟喬親王の背景を偲び、親王を世話した地元の末<sup>まつ</sup>裔<sup>えい</sup>の方に協力して頂いて取材し、この絵を描くことができました。

### 絵の中の御所の建物



鴨川の風景 四条大橋から三条大橋、鴨川の源流雲ヶ畑へと続く。

以上